

ICHSEA 2023

「博士・修士課程学生のための国際研究集会渡航助成」事後報告書

相関基礎科学系 博士後期課程 3年 武正泰史 (三村研究室)

今回「博士・修士課程学生のための国際研究集会渡航助成」を頂き、2023年8月21日～8月25日にかけて、ドイツのフランクフルトで開催された ICHSEA2023 (the 16th International Conference of History of Science in East Asia) に参加した。この国際学会は東アジアを対象とする科学史研究者が4年に1度集まる国際学会である。広く東アジアの科学史を対象としており、医学史、気象学史、天文学史、数学史、東西交流史等々、様々なバックグラウンドを持つ研究者が一同に会した。

報告者は“the Mathematical Study of Arima Yoriyuki”という題目で研究報告を行った。江戸時代の数学者であり、久留米藩7代目藩主である有馬頼僮(1714–1783)は数学書を40点近く執筆していた。その著作について分析しつつ、彼と交流していた数学者、天文学者である山路主住(1704–1772)、稲次正礼(1730–1798)、入江修敬(1699–1773)と有馬の関係性を検討した。その上で有馬が数学を趣味として研究していた可能性について議論した。質疑では有馬が公開したとされる「秘伝」、有馬が使用した雅号、日本数学史上における有馬の位置付けについて議論した。初めての英語発表であり、上手く質問に答えることができない場面もあったため、次回以後の国際学会での発表で改善できればと考えている。

自身の発表以外では多くのパネルセッションを聴講し、様々な研究報告を聞くことができた。さらにこの学会では、京都大学の平岡隆二氏、神戸大学の塚原東吾氏をはじめとした日本人研究者、さらに Christopher Cullen 氏、Cathérine Jami 氏や、台湾の Ying Jia-Ming 氏など多くの海外の研究者と交流を持つことができた。研究に関するディスカッションや今後の方針についても助言をいただき、非常に有意義な時間を過ごすことができた。加えて、同年代で日本数学史を研究する研究者とも交流することができ、将来的に共同研究を行い、国際学会でのパネルの企画、発表を目指すつもりである。

改めて今回の学会参加にあたり、「博士・修士課程学生のための国際研究集会渡航助成」からの助成を頂き、この場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。



写真：会場となった Goethe-University, Frankfurt am Main